

責めるより寄り添う

遺族 受刑者らに語る会

「被害者も加害者もつくりたくない」。事件などで肉親を失った3人の女性が会をつくり、刑務所や少年院で思いを語る活動を広げている。子どもやきょうだいの命を奪われた彼女らはなぜ、加害者の立場の受刑者らに向き合うのか。

3人は、長女を殺害された山口県防府市の中谷加代子さん(55)、いじめを受けた長女が自ら命を絶った横浜市の小森美登里さん(59)、東京・世田谷での一家殺人事件で妹一家を失った東京都港区の入江杏さん(59)。昨年末、加害者に思いを語る会「人権の翼」を発足させた。

全国の刑務所は被害者や遺族を招き、感情や経験を話してもらうことで、受刑者を自分の罪に向き合わせようとしている。

中谷さんと小森さんは、会発足前も刑務所や少年院で語っていた。そこへ小森さんの友人の入江さんが加わった。会では刑務所や少年院の依頼を一括して受け、3人のうち誰かが話に行く活動をしている。

3人は「事件を振り返ると、今もつらさや苦しさが

よみがえる」と口をそろえる。「だからこそ、犯罪を繰り返して欲しくないのです」と、小森さんは話す。

「人の痛みを感じて」

中谷さんは2006年、高専5年生だった長女の歩さん(当時20)を失った。学校で同級生の少年に首をしめられ、殺害された。

警察で遺体を確認した後、黒なぞ、犯人への「真の黒な憎しみ」がわき起こった。少年は10日後、首をつって自殺しているのが見つ

会の名には、「人権は、被害者も加害者もどんな人も自由に幸せに生きるための翼」との思いを込めた。活動はホームページ(<http://d:/wohr.jp/>)で紹介している。

かった。知らせを受け、へたりこんだ。なぜ、なぜと問い続ける日が続く。

とところがいつからか、少年のことを考えるようになった。彼が命について真剣に考えていたら、悩みを打ち明ける人がいたら……。事件の1年半後、少年の両親が謝罪にきた。事件当



中谷加代子さん(中央)が娘を殺害された直後の思いを表現した絵を見ながら話す小森美登里さん(右)、入江杏さん(左)＝山口県宇部市

初より一回り小さくなった母親の姿に胸をつかれ、思わず肩を抱いた。

12年、中谷さんは犯罪被害者や遺族を支える活動を開始。同年から思いを受刑者に語るようになった。

「事件はなぜ起きたのか。環境や生い立ちがあなただけを追い詰めたのかもしれない」。「苦しかったですね」「皆弱いんだから」。声をかけると、涙ぐむ受刑者が少なくないとい

う。

中谷さんはこう考える。「責めるより寄り添うことで加害者は自分を見つめ、傷つけた人の痛みを感じるようになるのではないか」

小森さんは1998年、高1で一人娘の香澄さん(当時15)が部活の仲間にいじめられ、命を絶った。死を選ぶ4日前の香澄さんの言葉を忘れない。「優しい心が一番大切だよ。その心を持っていない(いじめられている)あの子たちの方がかわいそうなんだ」

入江さんは00年末に東京・世田谷で起きた一家殺人事件の犠牲者、宮澤泰子さん(当時41)の姉だ。死を悼み、事件の解決を願う集いを毎年開く。講演活動も続ける。テーマは「悲しみを生きる力」だ。(氏岡真弓)